

V 三大商人について（インド編・その1）

小島賢治

明星大学経済学部特任教授

はじめに

筆者は、現在縁あって明星大学経済学部にて教鞭をとっていますが、従来は総合商社・三井物産の開発建設部門に40年近く在勤し、主に海外の開発建設プロジェクトに従事しておりました。したがって、欧米ではなく開発途上国の国々に延べ15年近く海外駐在してきた経験を積んでまいりました。中東ではイラクに3年半、その後、台湾・中国に3年半、スリランカ・インドに7年の駐在が主なものでした。この機会にアラブ商人、中国商人、インド商人のいわゆる三大商人とのビジネス経験談を述べさせていただきたいと存じます。今回及び次回では、その中でも5年前まで駐在していたインドについて、特に「インド商人とは」との視点に立って徒然なるままに思うところを記述させていただきたいと考えます。

インド商人とは

まずその人口規模ですが、在外インドビジネスマン＝印僑も含めた、インド人ビジネスマン全体をインド商人としてとらえるとすると、その母体となるインド本国の人口は約12億人と言われています。そして海外にいるインド人の人口は

約2000万人とされています。(2014年朝日新聞) 1979年インド外務省による統計では1050万人とありますので、この30年で2倍も増加したことがわかります。

いずれにせよ12億強の人口規模であります。中国人に次ぐ巨大さであります。こうした人口規模のもとでビジネスを展開しているのがインド商人と言えます。

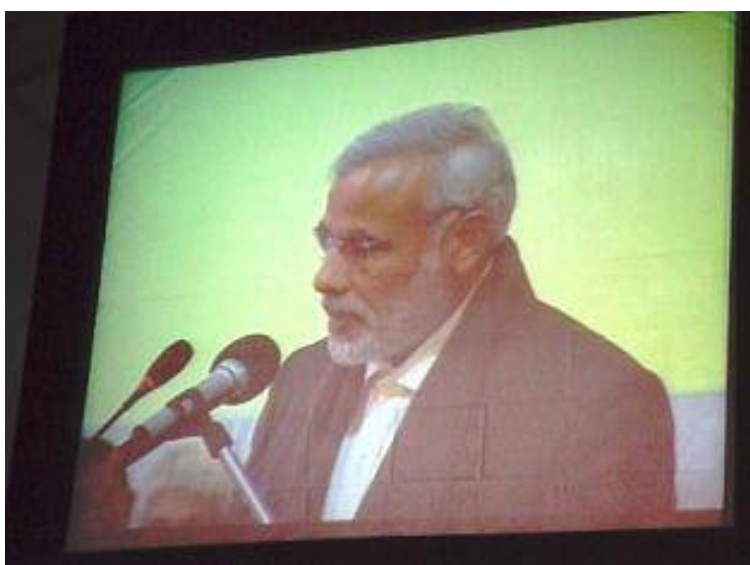
モディ新首相の登場

2014年6月、なんと10年ぶりにインドの首相が交代、これまでの与党連合政権から野党第一党・インド国民党の党首モディ氏が新首相となりました。彼は実はインド北西部にあるグジャラート州の州知事に長く在任していましたが、私は9年前に、彼が次の時代を担うのではないかと予測していました。それは現地の国際会議に出席した時のこと、日本からは竹中平蔵氏も客員としてスピーチをしたのですが、残念ながら、モディ氏のスピーチとは格段の差がありました。

彼の演説を再演してみましよう。「ここにコップ半分の水があります。ある人はコップに半分しか水が入っていないと言います。ちょっと前向きな人は水が半分も入っていると言うでしょう。でも私は

違います。このコップは、半分の水と空気で満杯だと私は言います。皆さん、このように物事は常に前向きにとらえ頑張りま

しょう！」単純な例え話でしたが大変に判り易く感動的なスピーチで、瞬時に引き込まれてしまいました。



(グジャラート商工会議での撮影、2005年9月)

インドを代表する三大特色

インドと言われて思い浮かぶ有名なものを3つ上げるとしたら、「カレー」、「数学が出来る」、「カースト制度」、などではないでしょうか。それぞれについてちょっと解説してみましょう。

カレー料理は日本のカレーライスに非ず

和食には、天麩羅、寿司、蕎麦など沢山の種類があり、これらを称して「日本料理」とすることは、誰でもご理解いただけると思います。実はインドの「カレー料理」についてもこれと全く同じことが言えるのであります。すなわち、一言で「カレー」と称するにはあまりにも種類も範囲も広いということです。日本人が大好きな「カ

レー」はほんの一部の料理にすぎません。インド通の方はご存知でしょうが、ポテトカレー、ハウレンソウカレー、カシューナッツカレーなどその種類は豊富ですし、サイドメニューも実に沢山の種類があります。私はニューデリィに駐在していましたが、首都なので各州の会館がほとんどあり、そこの食堂が一般開放されていました。ランチタイムにあちこちの州のカレーを食べ比べることが出来るのです。とても嬉しい体験でありました。それほど地域、地域で、食べ方も食材も料理の仕方も異なります。

ちなみにスリランカカレーも特徴的です。インドカレーとの一番の違いは、ダシがカツオの粉末であることです。周囲を

海に囲まれた島国だからこそ、でしょうか。

州によって法律が異なる

従ってカレーだけではありません。州によっては法律も異なります。インドは大国です。先ほど触れたグジャラート州も約1億人の人口規模です。つまり州知事と言っても、一つの国の首相と対等レベルの規模なのであります。全部で28州＋7直轄地もあります。そして州ごとに法律が異なるものもあり、たとえばグジャラート州では禁酒法が設定されています。日本企業も数多く進出していますが、皆さんここではお酒は飲めません。ニューデリーのある首都圏では女性のサービス業(飲食店の接客員など)は禁止されていますが、ムンバイでは女性のいるナイトクラブが沢山あります。このように州によって全く違う国にいるような気がするくらいです。ニューデリーのレストランでも女給が働いているじゃないか、とおっしゃる方がいるかもしれませんが、彼女たちはみなネパール系のインド人、地方からの出稼ぎ労働者です。ただし、国際的なホテルでのサービス員は除外されていますので念のため。

インド式数学、英語の達人、のウソ

次に、インドと言えれば思い描くことは、「インド人は皆算数が得意」ではないでしょうか。「皆、英語が上手に話せる」も同様です。では現実はどうでしょうか。現地に住めば一日でわかりますが、街中で

はほとんど英語は通じません。お店で買い物をしたり、レストランで精算をしたりときに暗算どころか電卓すら碌に使いこなせません。私が知る限り、一流企業の社員たちは皆英語が堪能ですが、99 x 99をスラスラ暗記しているインド人にはお目にかかりませんでした。あるとき、日本の新聞記者インド駐在員(たまたま大学の後輩)と話す機会がありました。私は日頃のうつぶんを彼に伝えました。「君たちマスコミが面白がって、インド人はインド式数学で教育されていて、そのレベルは極めて高い。みたいなことを報道するから、ほとんどの日本人は信じ切っているんだ。私自身もこちらへ来るまで、インド人たちは数学も英語も達人、と本気でそう思っていたよ」と嫌味を申しあげました。

すると彼の返答はこうでした。「確かに先輩のご指摘はごもっともです。自分も実感としてほとんどのインド人が数学も英語もできないと感じました。でも、でもです。たとえ5%の比率だとしても、我々はたまたま会う機会が少なかったとして、実際にその達人は居るとしましょう。すると絶対数としては5000万人以上となります。これは日本の成人社会人の数に匹敵する数値となります。やっぱり凄いことになりませんか？」私は返す言葉が見つかりませんでした。

カースト制度は三次元マトリックス

この「カースト制度」もインドを語るに

は外せないキーワードです。ただ、ほとんどの日本人は、日本の封建時代にあった士農工商的な身分制度を想像していることと思います。確かにインドも「ヴァルナ」と呼ばれる身分カーストがあります。4つの階層に分かれており、再上級がバラモンと呼ばれるかつての司祭の階級、次がクシャトリアと呼ばれる皇族・武士の階級、3番目はヴァイシアと呼ばれる商人など平民の階層、そして一番下がスードラと呼ばれる卑しい職業に従事する階層、となっております。そして実はこのさらに下に不可触賤民(アンタッチャブル)と呼ばれる人間扱いされない階層が約1億人いると言われていています。実は現在このアンタッチャブルは、それなりに身分評価をされています。

警察官や消防士を新規募集する際には、カーストごとに募集人数を指定して採用試験を行います。そしてこの最下層のアンタッチャブルの人数枠が、4番目のスードラよりも多いことから政府批判のデモが行われたことがありました。さらに驚いたことに、自分のスードラという階層を捨て去り、自分はアンタッチャブルだとして応募する人間まで現れたそうです。なんだか訳がわからなくなってしまいました。

もう一つのカースト、それは職業のカーストです。鍛冶屋の息子は鍛冶屋に、大工の倅はやはり大工に、といったところです。これはヨーロッパにおいても存在していたものですが。

さらにもう一つが、出身地のカーストです。インドは大国ですからかつては諸侯が地域を治めていたわけです。日本の藩のようなものでしょうか。その出身地の繋がりも強力な結び付きがあるわけです。アラブ人の部族意識に近いものともいえましょう。

IT産業が伸びた本当の理由

例え話をしましょう。なぜ、インドでIT産業やIT技術者が急成長したか。それはITという職種が過去には存在しなかったわけで、当然、カーストもなかったわけです。そのため優秀な若者が誰でも参入できたからだ、という説がもっぱらです。上記のカースト制度の背景を理解していれば、容易にこの結論に達することが出来るわけです。

もう一つの例では、映画産業があります。いわば映画カーストです。これも映画というものが発明されて職業化されてから生まれてきたわけで、現在、有名な俳優やプロデューサーなど映画産業に関わる人間が作り上げた特権階級的な集団であります。この人たちが身内で姻戚関係、世襲的に俳優を目指すものですから、まさに必然としてカースト化していったわけです。

映画産業で思い出したのですが、2009年にアカデミー賞を取った「スラムドッグ・ミليونエアー」はインドの下層階級事情を分かりやすく描いていて、実に楽しめました。特に乞食のアンダーグラウ

インド社会の熾烈さは凄いものですが、今でも街中で手足のない物乞いや、未熟児のような赤ん坊を抱いた物乞いを見かけます。実は彼らもプロ集団で、身体障害者は人為的に傷付けられた者、赤ん坊も数多く取り揃えられている、と聞き及んでいます。そして、この集団のボスたちは、年に一度、バンコクやシンガポールで全国大会を兼ねた大豪遊をするのだとか。これも一種のカーストではないでしょうか。

インドの金持ち

ある資産家の誕生日祝いにご招待され、お宅に伺った時の話です。200m四方はあるでしょうか。街区のワンブロック全体を占めた敷地で、それは、それは大邸宅で

ありました。エントランスからマリーゴールドの花が敷き詰められ、オレンジ色の絨毯のようです。広い庭園にはステージが設けられ、ボリウッドから呼び寄せられたと思われるダンサーたちが、ダンスショーで盛り上げています。夕暮れ時になると照明が落とされ、スポットライトが照らし出す中を、主が象に乗って登場してきました。これを皮切りにプロの芸人のショーが次々と、そして飲めや歌えのどんちゃん騒ぎ、ステージのフィナーレはご主人もステージに上がり、客も総出でのボリウッドダンスとなりました。さらに驚いたのは、この日の最後が、何と打ち上げ花火で締めくくられたことでした。インドの金持ちは日本では想像もできない桁違いさ、でありました。



(インドの富豪、自邸での誕生パーティ。2004年撮影)

インドのホームレス

以下はホームレス一家の写真です。子供たちの明るい笑顔が印象的です。お父さんが警備員の制服姿で出勤していくのも印象的でした。



(スラムの少年たち。2004年撮影)



(通学途中の女子生徒たち。2004年撮影)

上の写真はリキシャ（どうも語源は日本の人力車らしい）という人力タクシーですが、お金持ちの子女が6人も乗っていますね。でもこれを曳いているのも実は同年代の少年でした。複雑なインド社会の縮図であります。

インドの財閥

先にインドの金持ちの話をお話ししましたが、それならばインド財閥についても語らねば片手落ちということになります。インド最大の財閥はなんといってもタタ・グループです。総資産額は10兆円を超えグループ企業数は100社を超えています。従業員は50万人。数ある財閥の中でも群を抜いています。一族はパルシー商人（ペルシャ・ゾロアスター教徒でイスラム教の隆盛で祖国を追われ、その一部がインドに辿り着き、彼らはペルシャを意味するパルシーと呼ばれ、カーストに組み込まれることなく独自の集団となる。現在でもインド国内に約6万人がいると言われるが、その結束は固く強固な共同体を形成している）の末裔で、創業者は紡績工場を設立し木綿を生産し大成功、巨万の富を築いたのが礎です。現在は製鉄部門、自動車部門が主流であります。

第2位はHDFCグループ。こちらは銀行、保険などのトップ集団です。メーカー以外では絶大なるパワーを発揮しています。

第3位はリライアンスグループ。化学繊維から始まり、現在ではIT関連やチェーンストアなどの小売りでも業界トップです。創業者は日本の松下幸之助ばりの、立身出世の人物で、映画にもなっています。

第4位はITCグループ。こちらはホテル業界でのトップ集団です。海外、特にアジアの国々への進出は顕著であります。

ちょっと飛んで第9位はビルラグループ。こちらは非鉄金属、セメントなど建設資材での業界トップ集団であります。ちなみに私が関係したL&Tグループは建設業でのトップ集団で11位、DLFグループは不動産・開発部門でのトップですが21位となっています。

ということで、皆さんお判りの通り、各業界がそれぞれに集団化しており、やはり職業のカーストがここにも表れている様であります。地域的にみると、そのほとんどがムンバイに集中しています。ほとんどの財閥たちの発祥が商人や製造業であることから、自然とムンバイに集中したのでありましょう。デリーが発足地の財閥はほとんどありません。また、マハラジャが財閥を築いた例も見当たりません。つまりは日本の大名・殿様一族が、明治維新後に、財閥企業として生き残らなかったのと、同じ命運だったのではないでしょう。

パルシー商人

尚、パルシーについては有名な言い伝えがあります。当時、現地を支配するマハラジャは異教徒の彼らに難色を示し、器にミルクをなみなみにそそぐと「この器のように、この地にはよそ者が住む場所はない」と追い返そうとしたのです。これに対し、パルシーの長老が、その器に砂糖をさらさらと注ぎながら「ご覧ください。私がいくら砂糖を加えてもミルクは一滴も器から零れ落ちません。我々はこの砂糖のように社会に溶け込み、人々に利益をもたらすことでしょう」と説得し、認められたというものです。

インドの税率

所得税は0~30%、100万Rsを超えると30%ですがこれが上限ですから日本よりははるかに低率です。

法人税も最大で約34%（1億Rs以上）ですからこれも低率と言えます。源泉徴収税は日本と大差なく、利子には20%、配当益には17%となっています。

問題は、日本の消費税に相当する州付加価値税（VAT）と中央販売税です。これが非常に判りにくく、外国からの進出企業の悩みの種です。州によって税率が異なりますし、州をまたがると中央販売税が適用されたり、州を行ったり来たりした場合はそれぞれ課税されたりと複雑です。大体12.5%程度ですから税率的には

リーズナブルかもしれません。

資産家や財閥優遇だとして昨今問題視されてきているのが、相続税です。現在はゼロですが、28年前にさかのぼって復活との噂が出ているようです。しかし、インドの金持ち達が手を打っていないはずがありません。恐らく一族の関連施設への寄付や、その他もろもろの節税対策の逃げ道は無数にあるはずで

インドの公共料金

公共料金といえば、電気、水道、下水、ガスですが、これは州によってばらばらです。それぞれが料率を決めていますが、電気代はどこも高めであります。でもこれが不思議なことに、ほとんどの人が支払っていないのではと疑いたくなります。企業・法人は別として、個人が支払うべき電気代の実収入は、恐らく10%以下なのではないでしょうか。電線を見ればわかりますが、どれが誰だか全く見当もつきません。もう一つの公共料金、交通機関の料金ですが、これは比較的割安です。選挙のためには、これだけは値上げできないのだと聞いたことがあります。選挙の時には地元出身地へ戻らなければならず、そのための交通費は安くならねばならないのだと。残念ながら私の移動手段は、もっぱら運転手付きの社有車でしたので、電車もバスも乗った経験がありませんので、体験談は語れません。



(とぐろを巻く電線。2004年撮影)

インドの税関

引っ越し荷物では、必ず何か足りなくなります。これは入国時も帰国時も同様です。

どこかで誰かがピンポイントで引き抜いてしまいます。ある宝飾品を作成する企業の部長から伺ったウソのような本当の話です。

空輸する製品（ネックレスやブローチなど）を詰めた箱の一番上に、わざわざ現地語で「この上部一段にある品は、皆さん検査官の方々へのサンプル試供品です。どうぞお取りください。しかし下部の製品は販売用なのでお手を付けないでくだ

さい」と書いた紙を張り付けているそうです。

ここまでインドの解説的なエピソードを書き連ねてきましたが、多少なりとも現地事情を肌で感じ取っていただけましたでしょうか。インド商人というよりも、まずインド人そのものを知らずして彼らとビジネスはできない、という観点から書かせていただきました。

次号では、インドでは決して避けて通れない宗教的な背景について、そして実務での苦労話などについて、述べさせていたきたいと思います。